

『一乗拾玉抄』所引和歌攷

中 野 真麻理

要 旨 『一乗拾玉抄』をはじめ、中世『法華經』注釈書に見える道歌「仏トハ何ライワマノ菩提 只慈悲心ニシク物ゾナキ」は、御伽草子『富士の人穴の草子』にも引かれる。この御伽草子には弁才天信仰の反映が看取される。天台僧は弁才天を仏法の守護神として崇め、『江島縁起』などの成立・伝来にも深く関わった。

弁才天信仰は観音信仰とも融合した。その顕著な例として江州三井寺が挙げられる。また、三井寺五別所の一つ、尾蔵寺の本尊「笠脱観音」については、中世『法華経』注釈書に頻出する和泉式部説話・詠歌との関連が推測されよう。

江州の観音霊場岩間寺は、三井寺修験の修行に励む僧侶たちが集う場でもあった。本稿冒頭の道歌は、この岩間寺を詠み込んだ一首であったかと思われる。

一

仏トハ何ライワマノ菩提 只慈悲心ニシク物ゾ無キ

右の一首は、『一乗拾玉抄』卷一、『法華經』序品の注釈部分に引かれた道歌である。⁽¹⁾

一三種ノ法花ノ教主事 陰密法花ハ應身、顯說法花ハ報身、根本ハ法身也、所詮法界ノ里智慈悲ヲ明ラムルガ三身ノ說法ヲ聞ニテ有ル也、学者ノ一義云、仏界ニ三身有レドモ應身無縁ノ慈悲ヲ本ト爲ル也、サレバ大日經云、仏身者大慈悲心是也矣、一切衆生ニ無縁ノ慈悲ヲ施シテ挾合与樂スルヲ仏トハ云也、譬バ以^テ一味ノ雨^ヲ千草万木ヲ如^レ潤ガ也、

哥云 仏トハ何ニライワマノ菩提 只慈悲心ニシク物ゾ無キ矣

(『一乗拾玉抄』)

この歌は同書卷二にも重出する。

一偈頌下 是ハ重頌ノ偈也、我等今日ト云ハ我等ト云ハ四大声聞也、今日ト云ハ尺尊一代ノ間也、然ニ此仏教ト云ハ三世一念ノ内證ナレバ今日ト云ハ只今ノ事ナリ、當座聽衆ハ皆ナ万二千ノ声聞也、當得作仏ト云ハ尺云答寿即仏也矣、答寿ナレバ慈悲アリ、其ノ慈悲即チ仏也、サレバ大日經云、仏心者大慈悲是也矣、

哥云 仏ケトハ何ライハマノコケ庭 タゞ慈悲心ニシク物ゾナキ

(信解品)

『法華經鷲林拾葉鈔』は、この歌の下の方に異伝があつたことを伝えている。⁽²⁾

一法華ハ衆生成佛ノ直躰ナル故ニ一切衆生成佛ノ佛躰ニ付テ可^レ定能説ノ教主也。旦那流ニハ以^テ應身成佛ノ佛躰ト定ル也。大日經ニ云。佛心ノ者大慈悲心是也文。佛者以^テ慈悲爲^レ本寂光真女ノ内證ヨリ分段同居ニ垂^レ迹

ヲ成道シ一代半備ノ經教ヲ説ク事ハ爲^{ナレバ}衆生利益、悉ク無縁ノ慈悲ヲ爲^レ体ト也。仍以應身^ヲ可^レ爲^レ本云云。當流ニハ佛ト云ハ智者覺者ナレバ以^テ智恵爲^レ本。誠ニ衆生成佛ノ体ト云ハ自受用本覺ノ智体ヲ開ニ名ル故ニ必ず以^テ報身可^レ爲^レ教主、仍慈悲佛智恵佛ト云事有^レ之。能々可^レ思擇ス。

佛トハ何ヲ岩間ノ苔筵　心一ツニシク物ハナシ

(卷一・序品)

『法華經直談鈔』では、十大弟子の一人「富樓那」にまつわる説話を締め括るに際して、「仏トハ」の歌が用いられた。⁽³⁾ 同書によれば、富樓那は慈悲第一の人であつた。慈悲心の重要性を強調する道歌は、富樓那伝を説く場で引用するにいかにも相応しい。

フルナハ慈悲第一ノ人也、常ニハ説法第一ト云也、夫ト云モ慈悲ヨリ起ル也、サレバ説法第一ト云ガ即慈悲第一也ト云事、彼ノフルナハ人が不^レトモ信ゼ以^レテ拳ヲ不^レン打タ者我レ説法ン、縦ヒ又拳ニテ打トモ木ニテ不^レン打タ者説法セン、縦ヒ又木デ打トモ以^レテ刀ヲ不^レン切者説法ン、縦ヒ刀ニテ切トモ不^レン死セ者説法セン、縦ヒ又死トモ自^レ本ト生死無常ノ身ナレバ説法故ニ死セバ夫レヲ限リト思テ説法ント云フ誓願也、故ニ説法第一ト云ガ即慈悲第一ノ故也、所詮ハ慈悲ガ肝要也、サレバ仏神共ニ慈悲ヲ以^テ専ラトシ玉ヘリ、大日經ニハ仏心者大慈悲心是也矣、神明ノ託宣ニハ雖為重服深厚可趣ク慈悲ノ室ニハ矣、十禪師ノ託宣ニモ万行皆往生ノ因タリ、慈悲質直ヲ具ルガ故ニ万行皆不往生ノ因タリ、慈悲質直ヲ不具セ故ニト矣、往生極樂ノ修因ト云モ偏ニ慈悲質直ガ肝要也、

哥ニ云ク　仏トハ何ニライワマノコケムシロ　只慈ヒ心ニシク物ハナシ

(『法華經直談鈔』卷第四・五百品)

『法華經』注釈書三種が共通して書き留めた道歌一首は、御伽草子『富士の人穴の草子』にも見出される。この作

品については、松本隆信「室町時代物語類現存本簡明目録」⁽⁴⁾に、十四系統に分類された本文、ならびに、未検討の本文計五十本余りが挙げられており、所在不明の本文を含め、膨大な数の伝本が存在する。今、慶長八年写本によって、筋を追ってみよう。

正治元年（一一九九）卯月三日辰の刻、源頼家は家臣和田平太胤長を召し出し、世に聞こえる富士の人穴に入り、どのような不思議があるか、確かめて来るよう命じた。死を覚悟して人穴に赴いた和田平太であったが、洞窟内で機を織る若い女房に追い返されてしまう。

頼家は人穴に入る者に所領四百町を褒美として与えるとの触れを出した。仁田四郎忠綱がこれに応えた。彼は「七日目の午の刻には戻って来よう」と言い残して人穴へ入った。

今回は機を織る女房にも会わず、奥へ奥へと進んで行くと、八棟造りの檜皮葺の御所が立ち並んでいた。軒から滴る水の音は琵琶の音のよう、松の梢を吹き渡る風は颯々として、煩惱の雲も晴れるような心地がする。御所の中には一面の琵琶が置かれ、金銀錦で飾られた邸内の様は極楽浄土さながらであった。

丑寅の方角には池があり、さらに、立派な御所が建てられていた。そこは丈二十尋に及ぶ大蛇の住処であった。この大蛇こそ浅間大菩薩の化身であった。大蛇は昼夜三度の受苦を鎮めるため、仁田四郎の太刀を乞うた。その礼として、大蛇は童子の姿と変じ、四郎に向かって、「人穴の中の地獄極楽の様相を見せよう」と言った。

賽の河原・三途の川・死出の山・畜生道・修羅道など、恐ろしい地獄の有様が次々四郎の眼前に展開した。その中に、一人、玉の輿に乗り、菩薩に守られて天に昇る美しい女房がいた。

又、天を見れば、かんざしいつくしき女、ようらくの玉の輿に乗りて、黄金の幡を大悲の風に吹きなびかして、廿五の菩薩は音楽をなして、観音、勢至は影向し給ふところあり、新田、大菩薩に問ひ申せば、常陸国に、きく

たのこうりの女なり、しかも、富貴の家に生まれて、心やさしくして、僧法師を供養し、無縁の物をはぐくみ、寒き物には衣裳を与へ、ことに此女は座頭に目をかけてあり、此上に、弁才天のあはれみによつて、いよく富貴は日に増し、年に増したり、されば、座頭といふ物は、人の用にもた、ぬ物なり、かやうの物に深く心ざしあるによつて、妙音弁才天も守り給ふ、かの女房は、いとけなき時より立居に慈悲を思ひけり、されば、あるうたにも、

ほとけとは何をいわまのこけむしろ たゞ慈悲心にしく物はなし

かやうのうたを聞くにつけても、心ざし深かりけり、かくて、かの女房を帝釈に申せ、九品浄土へ観音勢至迎ひ給へり、

〔室町時代物語大成〕所収〕

ここに、中世『法華経』注釈書の引く道歌「仏とは」が活用されている。

浅間大菩薩は、仁田四郎に閻魔庁・極楽を拜ませた後、黄金の草子三帖を手渡し、「三年三月の間、ここで見聞きした出来事を口外してはならない」と戒めて日本へ送り返した。だが、君命背き難く、四郎が洞窟内での体験を皆に語り聞かせたところ、たちまち、天より声が響き、彼は四十一歳にして命を失った。

清水堂本「富士之人穴の由来」では、仁田四郎は辛くも命拾いをして⁽⁵⁾いる。

忠綱今ハ是非有まじと観念して岩屋の次第一々に言上しけるに（中略）時に黒雲の中よりいなづまの如く雷明の聲にてよばわりけるは、いかに忠綱自らが相がう、いま六道の物語り致したるこそおろかなり。今こそ思ひ知らせんと呼べる声、すさまじかりける次第なり。君を始め一座興をさまし驚きける時に、又黒雲の内より大音声にて汝ち忠綱、富士権現の仰せを背き罪不軽いへども一命を捨て言上したる忠臣の徳に依て命は助け玉ふなりと声して雲晴いかづちも富士の方へしづまりけり。（中略）大菩薩我を信心する人は壹年に拾式度此書を読むべし。又

得読ざる人ハ外人によませ聞べし。悪事災難通れ息災延命との御誓ひなり。必疑ふ事なかれ。是を読奉る。富士浅間大菩薩南無阿弥陀仏と廿一遍唱ふべし。歌に、

並びつゝ、仏の道を尋ねれば 我心にぞたづねいりけり

仏とハ何をいわまの苔むしろ たゞ慈悲心にしくものハなし

末尾の「仏とハ」の歌は先出の道歌に等しい。この一首が書承・口承を通じて広く人口に膾炙していたことを知る。⁽⁶⁾

二

常陸国の女房をめぐる説話は、『富士の人穴の草子』諸本中に散見する。一例として、寛永四年刊本（『室町時代物語大成』所収）を挙げる。

あれは常陸の国とあふしうのさかい、いはしろのきくたのこほり、うへだにある女房の富貴の家に生まれ、五戒をたもち、三宝をたしなみ申、心に慈悲をもち、寒げなる者には衣裳をとらせ、ひだるげなる者には食をあたへ、仏の御前にて香をもち、花をつみ、念仏三昧にして施行をひき、後生を大事と思ひたる者なり、

女房を慈悲深い人物として描く点は、慶長八年写『富士の人穴の草子』に同じい。しかし、先の道歌は引かれておらず、本文も簡略である。とりわけ、慶長八年本が諸本と大きく異なるのは、座頭を憐んだ徳により、女房が弁才天の擁護を得たと語る一点であろう。『妙音講縁起』（正徳三年奥書、写本一冊）には、座頭に慈悲を与えた人間は、賀茂大明神・妙音弁才天・天満大自在天神の加護を得ると説かれている。

加茂大明神妙音弁財天天滿大自在天神は座頭加護の御神也、我前に百度參らんよりハ、一度座頭に慈悲を加へな
バ永く其者の災難を除、子孫繁榮にし給ふべし、
〔妙音講縁起〕

弁才天は山林洞窟に住する（『金光明最勝王經』）。

或在 山巖深險處 或居 坎窟及河邊

或在 大樹諸叢林 天女多依 此中住

假使山林野人輩 亦常供 養於天女

以 孔雀羽 作 幡旗 於一切時 常護世

師子虎狼恒圍遶 牛羊鷄等亦相依

（卷第七「大辨才天女品第十五之一」）

古来、江州竹生島・相州江島・芸州巖島などは三弁天として名高い。文保二年（一二三二）成立の『溪風拾葉集』
卷第百八「辨才天事」は、弁才天の浄土の洞窟は互に通い合っていると注し、「総ジテ山河大地悉ク此尊ノ眷屬ノ
所在也」と説く。^⑦天台僧たちは弁才天を仏法の守護神としても崇敬していた。

一。五大院碑文云。江州二有 靈島。生身ノ辨才天坐ス。叡山ノ佛法可 繁昌。相州二有 靈島。生身辨才天坐。
鎌倉ノ佛法可 繁昌云云。

一。於日本 辨才天浄土義有耶。相傳云。吉野奥天河。アキノ巖島。江州竹生島也。此三即如三辨寶所并ニ穴ア
キ通タル也。其外諸諸靈島皆辨才ノ浄土也。或ハ表 本地高高^シ坐 高山峯^ニ。或表 深禪定^ヲ坐 大海ノ底^ニ。總ジテ
山河大地悉ク此尊ノ眷屬ノ所住也。
〔溪風拾葉集〕

文中、「五大院」とは、「五大院先徳」と称えられた天台の学僧「安然」を指す。安然の著作や教説・伝説はしばし
ば中世『法華經』注釈書の引くところであり、例えば、安然の貧窮説話は『法華經鷲林拾葉鈔』卷二・序品一之二に

伝えられている。⁽⁸⁾

一 金輪院安恵和尚五大院ノ先徳兄弟ニテ御座也、而ニ安恵福德世ニ勝レ、七寶充滿セリ、或時、坊中ニ無一物、衣食共闕セリ、此時安恵云、彼ノ安然坊可_レ来相也、言モ不_レルニ終五大院先徳来臨セリ、安然共住ノ間、一物モ無_レ之、婦玉ヘバ如_レ元福貴也、此ハ安恵和尚三千本有ノ俗諦常住ノ觀ニ住セリ、故ニ坊中常ニ福貴也、安然ハ諸法無一物ノ畢竟空寂ノ理ヲ觀玉フ故ニ無一物空假ニ觀ノ中ニ空觀勝ル、事ヲ顯也云云、

『溪風拾葉集』卷五十七に引く安然の事跡から関連記事を抄出する。

一。五大院御釋ノ名譽ノ事 後嵯峨法皇御代密教肝心ノ要文可_レ撰進由。山門東寺ハ被_レ仰下_レ之時。東寺法師。一向五大院ノ御釋ヲ注進セリ云云。

又云。或東寺眞言師云。内内覺人師ト與トノ五大院御釋ヲ懷中ノ教相ヲハ沙汰シ候也。此等ノ御釋無ンハ東寺ノ教相モ可_レ難_レ明事也云云々。

又云。五大院御釋ヲ見テ哀_レ我カ東寺門流ノ先徳ノ御釋ナラマシカハト何ウ_レシカラマシト申合ヘリ云云。^{イカガ}

尋云。五大院御作ノ教時義菩提心義等ハ始ハ東寺ニ有_レ之。山門ニハ無_レ之。山門ヨリ經奏聞申給テ以後山門ニ弘通アリ。（中略）已上物語也云云

尋云。世間口遊云。五大院ハ貧密無極ノ先徳也云云。（中略）此事ハ弘法大師ヲ安然和尚難破シ給ヘルヲ。東寺法師腹立シテ虚誕ヲ構出シテ。五大院ハ弘法大師ヲ難破ノ罪障ニ酬ベキ成_レキ貧窮ニ。終焉ノ時ハ東寺ノ門ノ側ニシテ土ヲ堀食テ餓死シ給ヘリト云云。（中略）

一。五大院入定所事 徳圓和尚ノ傳ヲ可_レ見_レ之也云云 相州星野ニシテ御入定也云云 此星野者。御出生ノ處ナルカ故ニ。於此所ニ有御入滅歟。三月十三日御縁日故ニ修御影供ヲ也云云。

即ち、安然出生・入滅の地は相州であるとの異伝があった。また、『走湯山縁起』卷三は安然を相州星谷の出身とし、相模国大山寺に詣でたと伝える。真名本『大山寺縁起』も安然の参詣を記す。⁽⁹⁾

陽成天皇元慶三年、大地震裂、佛像・經典、即時磨滅、處々僧房逢神火作灰燼矣、

八年安然和尚參詣當山、巡禮聖跡、見其顛倒、墜淚悲歎、就常念總持院、行秘法、童子來示曰、汝今所願、宜垂哀愍、或曰、明王顯現、和尚成就宿願、出山矣、
(『大山寺縁起』)

ここに、『安然和尚記』と題する書名を挙げ、『溪嵐拾葉集』と同じく竹生島・江島の両弁才天に関する説を述べる書がある。それは真名本『江島縁起』である。⁽¹⁰⁾

安然和尚者相模國星谷所生也。……安然和尚記曰、江州水海有靈嶋、名竹生嶋。生身辨才天住彼嶋。依之叡岳繁昌、爲鎮護國家之道場。我生國相州南海有靈嶋、號江嶋。生身辨才天在此嶋國。是故此國可爲繁昌基耳。

同縁起は続けて『安然秘所記』を引く。

安然秘所記曰、西嶋山者名女婦石。是即女天胎藏界會也。嶋西南之岸有巖窟。窟名金窟。自窟中時時放金光。是故名金窟。々内院二重也。於内院又有二窟。東窟安胎藏界曼荼羅、西窟安金剛界曼荼羅、辨才天座其中央(中略)。瑠璃檀上安置法華經一部。其前有池。々中有白龍、長八寸。是無熱池之龍王也。此窟即辨才天根本寶宮也(中略)。兩山之間有龍穴。是辨才天自然涌出之窟也。

富士山に最も近い弁才天の聖地としては、当然、この相州江ノ島弁才天が想起されるであらう。即ち、江ノ島弁才天の付近には、『仁田四郎拔穴』と呼ばれる洞窟が存在した。『新編鎌倉志』卷之六「仁田四郎拔穴」の項。

龍池の東にあり。穴二つあり。俗に二つやぐらとも云。仁田四郎忠常、富士の人穴より此へ拔出たりと云傳ふ。

『東鑑』に、建仁三年六月三日、頼家將軍、仁田四郎忠常を、富士山人穴に遣し、其所を究め見せしめ給。一夜を経て歸るとあり。此所へ拔出たりとはなし。

（『新編相模国風土記稿』第六卷所収）

同じく、『鎌倉攬勝考』卷之十一「江島」にも、「新田の抜穴」に関する記事が載る。

新田の抜穴……白龍窟の東に二穴あり。土人いふ、新田四郎忠常が、富士の穴より、此穴え抜たりといふは妄談なり。

（『新編相模国風土記稿』第六卷所収）

昭和十六年、江島神社発行の案内書にも、仁田四郎抜穴は名所の一つとして数えられている。

かくて入口の左に立つ「奥宮第二靈窟」の標石を見て、棧橋傳ひに第二靈窟への隧道へかゝる。昭和七年六月の開鑿で、長さは二十米餘（十四間四尺）で、抜ければ赤く塗つた鐵筋混凝土造の棧橋に出る。波濤頻に洗ふ奇岩怪石の上に架せられてある。長さ八十二米（四十五間）昭和七年八月の架設である。（中略）第二靈窟は、第一御窟の東方約九十八米（五十間）を隔つる南面の斷壁にある深さ九十八米餘（五十間）の左右の兩窟から成る。古からの靈跡であつて、此窟には市寸嶋比賣命が鎮ります。二拝二柏手に反響する神感深く、祈請に應へますも感切る。一窟から這入れば他の一窟へ通ずる土地の人は二つ櫓と唱へ、こゝが仁田四郎の抜穴で、富士山から續いてゐると云はれてゐた巖窟である。第一巖窟を暗い巖窟と云ふならば、第二靈窟は明るい巖窟と云へる。だが、濤聲が絶えず窟中に反響して、鼓の響が常に仙樂を奏するかと思はれ、靈氣自ら湧きて仙境の感眞に迫る。

（『江ノ島 片瀬 腰越』）

『富士の人穴の草子』の諸伝本の中には、主人公が「富士の人穴」から「繪の嶋」へ抜けたと明記する江戸末期写の一本もある。

新田、夢見シてい、名残惜まれて、斯迄御慈悲深キ御佛にわかれ参せ申事、扱くかなしき御事やと御衣の裾に

すがり見へければ、大菩薩も殊勝二覺ながら、早や／＼歸レ、そこ立退ト仰も違背成がたく指うつむひて居たりしが、いつのまにやら、相模の国繪の嶋へこそ出ける、新田是非なく立歸り、鎌倉殿へ参りければ、諸大名諸侍も驚て、死したる者の歸りし様に申ける、

この一本は、『富士の人穴の草子』と弁才天信仰との深い関わりを示唆するものと思う。慶長八年本『富士の人穴の草子』が語る常陸国の女房の挿話も、この作品の背景に弁才天をめぐる複雑な信仰が存在した一証といえよう。富士は後に五弁才天の一と称されている。

竹生島、榎島、巖島、金花山、富士山、謂之五辨天。

〔和漢三才図会〕七十三

三

『江島縁起』の詞書には、慈覺、安然など、天台高僧の名が見える。成立事情を詳述する真名本『江島縁起』によれば、同縁起は平安時代中期の天台僧「皇慶」の手によって成立し、相伝されて来たものであった。

右縁起、延暦寺阿闍梨傳燈大師位皇慶、俗姓橘氏。贈中納言廣相卿曾孫也。生而神靈、幼而能言。七歲初登叡山、住於東塔阿彌陀房。自少年學秘密教兩界三部別尊秘法護摩・灌頂梵字悉曇莫不窮源。寫窮慈覺之寶瓶。又就東寺明師景雲阿闍梨受彼宗灌頂大道。就中於神王法者、諸流十三家同傳之。以爲已心重寶、爲宮底龜鏡。於茲爲顯示神威於末代利益萬民。故訪問慈覺大師之舊儀、遍尋諸神之遺跡披古記、成此縁起。于時春秋七十七。永承二年丁亥七月廿六日丹波國於池上房所撰記也。以縁起法印前權僧都澄益

□傳明禪法印。法印付忠舜法印。法印授倫忠律師。倫忠付道譽。々々付承海。々々授眞勝。眞勝授隆信。

云云。

〔江島縁起〕

皇慶は天台宗谷流の祖として知られ、書写山性空上人の甥にあたる。七歳にして比叡山に登山、靜真に従い、東塔阿弥陀坊に住して密教を学んだ。

次ニ谷ノ御流トハ谷ノ阿闍梨ノ御下ヨリ三流ニ分テ穴太三昧法曼當時盛ニ弘通ス。谷阿闍梨皇慶。初ハ東塔ノ南谷ノ井ノ房ニ住シ給ヘリ。後丹州ニ隱居シテ、池上ノ大日寺ニ坐ケルヲ依山王ノ御崇_ム又還_ニ住シ玉山上。於_テ井ノ房御入滅シ玉フ。御在世ノ間、乙護法仕給ヘリ。近代謚號ヲ被_レ下。慈應和尚ト申ス也。彼ノ丹波ノ池上ハ其山ノ形横ノ五輪ナリ。眞言秘教弘通スルコト其ノ故ニヤト申也。谷ノ和尚ノ御奇特ハ彼ノ御傳ニ委細ナリ。匡房ノ筆記也。

〔山門穴太流受法次第〕

『江島縁起』は応永年間に甚だしく破損していたため、鏡麗大徳が請うてこれを新たに写した。末尾には天台末流清鏡院乗海とある。同縁起と天台宗とは密接に関わっていた。

于_レ時應永廿年霜月有_二備州_一宮内沙門鏡麗大徳、勤_二修靈社壇前_一、而幾積有_レ年矣、其嘆_二遺藁之舊本滅裂_一而深欲圖寫之謀、余請_レ書新編一簿爲_レ傳末流之鑒龜矣、聊感想志、豈實非小縁、只厭好_レ肉剋瘡、是恐_二烏焉馬矣_一、震丹南閩福州路游子書于永壽山之巖陰、

享祿肆季龍集辛卯夷則下澣八日書出

右筆廻國沙門天台末流清鏡院乗海云々

九州肥後住人

〔江島縁起〕

是澤恭三『江島弁財天の信仰史』⁽¹⁾は、真名本『江島縁起』について次のように解説している。

江島縁起の著者皇慶は右の奥書でもその畧伝を知る事が出来るが、（中略）叡山に在つて金光明王經の研究を専らとし、弁才天を勧請して、深くこれを信仰したことが知られているから、弁才天で知られた江島の縁起を撰述

した事も併せ考えられる事である。皇慶は永承四年七月廿六日に比叡山東塔井房で入寂したと伝えられているから、江島縁起は上記奥識語を信ずれば入寂の二年前に著された事になる。但しその入寂の月日と撰述の月日とが同月日であるのは疑問の持たれる点であるがこれを決定すべき資料が見当たらない。(中略)次に記された江島縁起相承の次第に澄慈より次々と伝授付授されて隆信に至っている。これは次第に書繼がれている筈のものであるから、今日伝存のものは授伝数度に亘る後世の一写本で一筆に記され、隆信の後を「云々」で終っているのは伝授の代々を省略しているものと認めねばならない。この相承血脈は普通の縁起の類には余り見受けられない記載であつて稀らしいものと云わねばならぬ。この江島縁起が皇慶の述作としてその法系に列せられた者にはのみ伝えられた秘書の一つであつたに相違ない。これらの伝承者が江島弁才天と如何なる關係に在るかは未だ詳かに為し得ないが、皇慶法流を伝うる一派の人々に相違ないと思う。

仮名本『江島縁起』全五巻にも江島弁才天の由来は詳しい。『藤沢市史』第七巻には、「五巻縁起の原本は、皇慶(永承四年寂寿七三)述作のものを潤色増補して作られ、(中略)制作時期は室町時代後期とみられる」との概説がある。本文中、殊に興味深いのは、弁才天の悪龍降伏説話である。

この島の上に天女降居したまへり、これ弁才天女の應作、無熱池龍王第三の姫、閻羅大王の姉、婆蘇大天の妹なり、(中略)湖水の悪龍はるかに天女の麗質を見て、ひそかに不堪の情緒を感じしむ、すなはち、天女のみもとに至りて、志の深きよしを聞こゆ、天女、いと、こゝろよからずしてのたまはく、我に本誓ありて、あまねく群萌をはごくむ好生の徳ものにあまねし、汝、慈憐なくして生命を絶つ、心姿ともに同からず、いづれの所にか配偶の妙述なからんや、龍のいはく、我、教命のまゝに、今よりのち、物のために毒あらじと誓はむ、哀憐を垂れてこの志を遂げしめよとありければ、天女、たやすく諾したまへり、その、ち、龍、人を殺すことなし、弁才天、

方便の力をもちて化作するところの鳥なり、これを江島明神とす、

（「江島縁起」）

龍は南を向き、山と化した。世人はこの山を龍口山と呼ぶようになった。

『金光明最勝王經』には、弁才天はよく諸龍を調伏する力を有すると説かれている。龍口山の由来は、こうした經説を踏まえて生成された説話であつたに違いない。

諸天女等集會時 如大海潮 必來應

於諸龍神藥叉衆 咸爲上首能調伏

（「金光明最勝王經」卷第七「大辨才天女品第十五之一」）

經於諸龍神藥叉衆或爲上首能調伏 下六調伏勝（『金光明最勝王經疏』卷第五本「大辨才天女品第十五之一」）

毒龍は、その後、養老七年春三月、泰澄が參詣した折に託宣を下して「惡逆の罪人が出た場合は、斬首の上、我が前に懸けよ」と告げた（真名本『江島縁起』）。

元正天皇養老七年癸亥自春三月、泰澄大師住江嶋、讀誦大乘經、念誦陀羅尼、專一心精進并每日乘船詣龍口山施與法樂、祈離業證果、（中略）明神謁對大師言、我受菩薩之法施、洗除三熱之惱垢、獲得宿明智、既知舊德之先處也、豈生惡心乎、雖然國土逆人出來者、斬頸懸我前、是非昔日之凶執、屢靜海內之凶賊、爲除逆人於萬里、又重說偈曰、

我是大光普照尊 爲度邪見衆生故 普門之中示逆跡 令於此所現龍口

泰澄承神之靈託、不錯神言令披露、自爾以降逆人出來時者、截頸懸山前、始自此也、

「龍ノ口の法難」で知られる日蓮上人は、龍ノ口での処刑が決定し、いよいよ首の座についた時、『法華經』の功力で一命を救われた。『日蓮上人註画讃』に引く龍口山の由来は、「元正天王御宇養老七年春三月」「誦大乘經」「每日乘船詣龍口山法樂」以下、細部にわたって真名本『江島縁起』と合致する。⁽¹²⁾

元正天王御宇養老七年春三月、泰澄大師住嶋誦大乘經、又每日乘船詣竜口山法樂、明神対大師曰、我受菩薩法施、既除三勢苦惱、得宿命智知旧徳先、豈生惡心、若有背国者、時斬頭懸我前、是非昔日凶執、捨其累賊四海内平云云、泰澄受神勅普伝人、自夫以来逆人出来斬頭懸山前事自是始矣、
(卷三)

『日蓮上人註画讃』は日澄の撰、彼は字を啓運・円明院と号し、日蓮宗の学匠であつた。文明十五年(一四八三)に鎌倉妙法寺で『法華經』を開講し、その学問は文龜三年(一五〇三)浄書の『法華啓運鈔』などにまとめられた。没年は永正七年(一五一〇)という。日澄の活躍した時期は、『二乗拾玉抄』類聚の長享二年(一四八八)、同書写の明応四年(一四九三)、また、『法華經鷲林拾葉鈔』成立の永正九年(一五一一)などと時を同じくしている。

相州龍口山にまつわる説話は、天台の学僧にとつても周知の地名由来譚であつた。『江島縁起』が天台僧の手を経て相承された事實は、この説話の伝播に影響力を持ったと思う。實際、『二乗拾玉抄』は、『法華經』序品の談義に臨み、先の惡龍調伏説話を語っている。

一 或食人肉ト云ニ付テ、物語云、鎌倉ノ龍大明神ト申ハ、人贅食玉フ也、是ハ江ノ嶋ノ弁才天、美女ノ形ニ現ジテ彼ノ明神ノ所ヘ行玉フ時、彼明神、弁才天ト夫妻ノ語ライヲ成ント宣ウ、其時、弁才天ノ云ク、人贅ヲ止メ給バ子細非ジト宣フ時、我レ食無クシテハ不_レ可_レ叶、所詮弁才天御計ヒ候ヘト有リケレバ、サラバ、鎌倉中ノ罪ノ者ハ龍ノ明神ノ御前ニテ切セ、贅ニ備可_レ申約束シテ夫妻ト成玉フ故ニ、其ノ以後ハ鎌倉中、罪者ヲバ龍ノ明神ノ御前ニテ切ト也云々、
(卷二・譬喩品)

『二乗拾玉抄』の龍明神は、「我レ食無クシテハ不_レ可_レ叶、所詮弁才天御計ヒ候ヘ」と訴えた。「雖然國土逆人出來者、斬_レ頭懸_レ我前、是非_レ昔日之凶執、屢靜_レ海内之凶賊、爲_レ除_レ逆人於萬里」と託宣した『江島縁起』の龍神とは趣を異にする。この一話は、談義の場において、より聴衆の興味を引くに十分な変容を遂げたといえよう。

四

仁平四年（一一五四）、天台僧戒光坊靜然は、皇慶の私記を中心として『行林抄』を著した。その第六十九卷は「辨才天法」にあたる。

座上有_レ𠬞字。或_レ𠬞字。字變成琵琶形。形變成辨才天女。首戴寶冠。莊嚴妙身。深嚴白肉色。色野蠶衣。種種妙德以嚴身。目如修廣青葉。衆相希有不思議。能放無垢智光。持琵琶。左膝立之。經云。常以八臂自莊嚴。無量眷屬周圍圍繞。（中略）觀想。心月輪上有_レ𠬞字。金色也。字變成琵琶。琵琶漸舒漸大。量等己身。琵琶即變成辨才天女。相好圓滿云云。（中略）義云。先仰左手當齊。如承把琵琶狀。右手相捻。餘散申之。（中略）一形像圖云。肉色。引琵琶。左膝立也。

（『行林抄』）

『仏像図彙』は、左膝を立て、琵琶を弾ずる弁才天の姿を描く。また、『発心集』第三「松室童子成佛の事」は松室の僧とその弟子との説話を書き留めている。仙人となつた弟子は、竹生島で行われる管弦の催しに琵琶を奏したいと思ひ、かつての師匠に琵琶を乞う。

……三月十八日に竹生島といふところにて、仙人集まりて樂をする事侍るに、琵琶をひくべき事の侍るが、えたづね出し侍らぬなり、かし給ひなんやといふ、やすき事なり、いづくへか奉るべきといへば、こゝにて給はらんといいてともに去りぬ、琵琶ををくりたりけれど、その時ハ人もなし、たゞ木のもとにきてぞかへりにける、さてこの法師ハ三月十七日に竹生島へ詣でたりけるに、十八日あかつきのねざめに、はるかにえもいはれぬ樂のこゑきこゆ、雲に響き、風にしたがひて、世の常の樂にも似ずおぼえてめでたかりければ、涙こぼしつゝ、きゝゐ

たるほどに、やうく近くなりて、樂のこゑとどまりぬとばかりありてえんに物をおく音のしければ、夜あけてこれを見るにありし琵琶なり、師、不思議の思ひをなして、これをわが物にせん事ハはかりありとて権現に奉る、かうばしきにほひ深くしみて、日比ふれどもうせざりけるとぞ、この琵琶、今にかの島にあり、うきたる事にあらず、

竹生島で奏樂が行われた三月十八日は観音の縁日である。江洲竹生島は弁才天の聖地であると同時に、西国三十三所霊場の第三十番札所、天台宗宝厳寺があつた。⁽¹³⁾

『瞽女縁起』を繙いてみよう。⁽¹⁴⁾

人王六十代嵯峨天皇第四の宮、女宮にて相模の宮、ごせ一派の元祖となり給ふ。忝くも賀茂明神、末世の盲人を不便と思召し、忝くも御事の腹に宿らせ給ひ、胎内より御目瞽にて御誕生ましまし、父大王、母后、神社佛閣の御祈祷有^レ之といへども、元來大願成就の種なれば、更に甲斐あらず、相模の姫宮七歳の御時、夢に紀伊國那智山如意輪觀音、夢枕に立せ給ふ、君は末世の女人盲人のつかさとならせ給ふ、……

本文中、賀茂明神は瞽女の祖と仰がれ、夢枕に熊野那智山の如意輪觀音が立つ。『當道新式目』では、賀茂明神は座頭の鎮守として崇められた。

一、加茂大明神を當道衆中の鎮守とし、古中今共に怠なく月詣す、加茂にも子細有にや御神定置せ給ひし法とて、賀茂一在所の輩高聲に經誦す、念佛申さず勿論舞うたはざる時^有、其折ふしも當道の諸藝致は憚なし、又始て社參する當道火を改め手水計にて拝す、加茂の火を免ず事

一、加茂大明神へ古例として田樂毎年上る事

先出『妙音講縁起』においても、賀茂明神は座頭の守護神であつた。遡つて『古今著聞集』卷第十五には、琵琶の

上達を賀茂明神に祈願した説話が載る (法深房父子藝道執心の事)。

古くから賀茂明神は龍神・雷神として知られているが、その本地は観音であつた (『古事談』第五「範兼蒙賀茂明神利生事」)。

他方、『溪嵐拾葉集』巻第百八によると、弁才天もまた、『法華經』に登場する龍女と同体とされ、本地は如意輪観音と考えられていた。

一、龍女辨才天一體ノ事 龍女ハ如意輪観音也。辨才天ノ本地又如意輪也。此尊ニ三身ノ習ト云事アリ。南方寶生尊ハ法身。如意輪観音ハ報身。龍女ハ應身ト云也。此三身共ニ如意寶珠ヲ以テ爲三摩耶形。此寶珠ハ境智冥合體也。

〔溪嵐拾葉集〕

『元亨釈書』巻第十八「如意尼」をめぐる説話にも、弁才天と如意輪観音同体説が説かれた。弁才天は福神に相應しく、「西北」の大石の上に降臨したとある。

如意尼者。天長帝之次妃也。(中略)十歳入王都。常詣如意輪觀自在菩薩靈場。(中略)妃雖專寵榮。志在山林。適一七日修如意輪供。第七後夜。持誦時閉目。悦然空中有妙音。告曰。攝州有寶山。号如意輪摩尼峰。昔神功皇后征新羅而還。埋如意珠及金甲冑弓箭寶劔衣服等。故亦曰武庫。汝盍居彼。妃聞言開目。端正天女乘白龍。擁白雲。向西南飛去。妃怪喜焉。蓋天女者。大辨才天也。白龍變石像。今猶在此地。又是役小角之旧趾也。(中略)妃又問曰。常住佛法守護爲何天。海曰。大辨才天女是也。妃即受天女法修之。第七夜。天女率十五輩童子降臨。(中略)其後海師修如意寶珠法。辨才天女又降居西北大石上。誓曰。我住此山爲一切貧乏衆生施財寶。

〔元亨釈書〕

仮名本『江島縁起』巻五の慈悲上人良眞伝も、江島弁才天を観音の垂迹とする。

元久元年二月上旬の比、千里の波濤をわたりて大唐に至り、慶仁禪師にあふて法を受けをはんぬ、その後、かのしまの繪圖を披見せしむ、仁禪師のいはく、汝いはざるに知りぬ、我聞かざるに悟りぬ、日本國に補陀落の樓閣あり、かのしまたるによりて大慈大悲の觀世音垂迹字賀弁才天女あらはれたまふ、まことにこれ言語道斷の靈地なり、

弁才天と觀音との深い関連性は、元禄十二年刊『繪入辨財天利益和談鈔』（三卷三冊）に読み取ることが出来る。同書は、弁才天の持物についてその一々を觀音と結び付けて説明する。

左第一鉾とハ、根本式に云、寶鉾の手ハ大悲大聖觀世音刀杖の難をはなれて、安樂の報を成せしむ云々（中略）
第二輪寶とハ、根本式にいはく、寶輪の手ハ馬頭觀音、横死の難をはなれ、丈夫の相を成せしむ、（中略）第三寶弓とハ、根本式にいはく、寶弓の手ハ、准胝大悲觀世音醜陋の相をはなれて、敬愛の報を成せしむ云々、（中略）第四寶珠とハ、根本式にいはく、寶珠の手ハ如意輪觀音貧賤の身をはなれ、富貴の報を成せしむ云々、（中略）右第一劔とハ、根本式にいはく、寶劔の手ハ大悲千手觀世音、ぐちの罪をはなれ、弁才の相を成せしむ云々、（中略）右第二棒とハ、根本式にいはく、寶棒手ハ十一面觀世音、呪詛の難をはなれ、無病の報を成せしむ云々、（中略）第三箭とハ、根本式にいはく、宝箭の手ハ不空羂索觀世音、盜賊の難をはなれ、聖王の位を成せしむ、（中略）第四鑰とハ、根本式にいはく、寶鑰の手ハ大悲白衣觀世音、無間の業をはなれて、仏果の位を成せしむ云々、

（卷一）

先述『日蓮上人註画讃』は、日蓮の頭上にまさに刀が降り下ろされようとする瞬間を画面に掲げた。天空に現れた光物から真直ぐに光が放たれ、刀は段々に折れてしまっている。詞書は以下の通りである。

当時江嶋巽大光物形如满月飛乾現于刎頭座上如鷹隼飛移後山大本松二本見即時雲霧出為昏闇此光物月天子所現也

（卷三第十七「竜口頸座」）

「光物形如満月」とは、『金光明最勝王經』卷第八「大辨才天女品第十五之一」にいう「面貌猶如盛満月 具足多聞作依處」「端正樂見如満月 言詞無滯出和音」などの文句に一致する。「飛乾」という描写は、『元亨釈書』卷第十八「辨才天女又降居西北大石上」と重なる。竜口頸座に出現した光物は、まさに弁才天の化身であつた。折れた刀は『法華經』觀世音菩薩普門品の文句「若復有人 臨當被害 稱觀世音菩薩名者 彼所執刀杖 尋段段壞而得解脫」「或遭王難苦 臨刑欲壽終 念彼觀音力 刀尋段段壞」からの影響と考えられる。この場面は、弁才天信仰と觀音信仰との融合を示す傍証として把握できよう。

五

『別尊雜記』（第四十四）には、弁才天の立像が収録され、像の下には「竹生島弁才天三井寺法輪寺本也」と書き込みがある。

三井寺園城寺の守護神は新羅明神であつた。⁽¹⁶⁾この神については『寺徳集』に言及がある。

問。明神御本誰人耶。

答。安藝國嚴嶋明神託宣云。我是娑竭羅龍王女子也。姉是法花提婆品之時即身成佛畢。又有男子。爲護智證大師佛法來給。三井寺新羅明神是也云々。

園城寺の新羅明神は、嚴島弁才天の兄弟と見做されていた。加えて、園城寺内にある西国三十三所の觀音靈場、正法寺の本尊もまた、如意輪觀音であつた。

『寺門高僧記』は、園城寺の行尊が記した「観音三十三所巡礼記」を収録する。平安時代の歌人としても有名な行尊は、十二歳で園城寺平等院明行親王に入室、台密修験の修行を積んだ。『元亨釈書』巻第十二・感進四「園城寺行尊」は「性好頭陀、十七潜出園城、涉跋名山靈區、適行山路、日晚獨臥岩間」と伝える。抜群の験力を認められ、嘉承二年（一一〇七）には鳥羽天皇の護持僧に召された。熊野御幸の先達を勤め、熊野三山檢校などを兼任している。彼は長承三年（一一三四）に園城寺金堂再建を果たし、その翌年寂した。⁽¹⁷⁾

行尊の残した記事では、巡礼の順番が現行と異なる。三井寺は第二十一番札所に挙げられており、石山寺を経て、二十三番岩間寺（現滋賀県大津市所在）へ至る。

観音靈所三十三所巡禮記 日數百廿日

……二十一番 如意輪 等身如意輪。園城寺。後三條院御願寺。 願主。聖豪内供。或大阿闍梨。

二十二番 石山寺 丈六如意輪。土佛二臂。 願主。聖武天皇。

二十三番 正法寺 等身千手。石間寺。 願主。泰朝大師。醍醐寺末寺。

〔寺門高僧記〕四

園城寺覚忠も西国三十三所巡礼について触れている。巡礼の順は行尊の記と重なる。

應保元年正月三十三所巡禮則記之。

……廿二番。近江國三井寺南院如意輪堂。五間南向。願主慶祚大阿闍梨。或聖豪内供。

廿三番。同國世多郡石山寺。御堂九間南向。本尊如意輪二臂丈六土佛。願主聖武天皇御願。

廿四番。同國岩間寺御堂。三間南向。本尊千手等身。願主泰朝大師。醍醐寺末寺。（中略）三十三所巡禮日

數七十五日

〔寺門高僧記〕六

江戸末期写『西国三十三所權輿』には、「如^レ是順禮結縁アリテ、三月十五日ヨリ六月朔日マデ七十五日也、是ヲ規

矩トシテ、順禮アルベキナリ」と言う。さらに安永八年刊『西国巡礼歌要解』には、

十四番 大津之三井寺

何時入ルヤ浪間ノ月ハ三井寺ノ 鐘ノヒバキニ明ルミツウミ

抑此歌ハ諸行無常ノ心ヲ詠ジ玉ヘリ、生死ノ常ナラヌ事、浪間ノ月ニタトヘ、人命ノ定マラヌ事ヲ何時入ルヤト云、鐘ノ響トハ、時ノ鐘ヲ聞テ、心口驚キ、無常ヲ覺ト云心ナリ、月ヲ見テ無常ノ鏡トス、古歌ニ

回り逢テ見シヤソレトモ分ヌマヌ 雲カクレニシ夜半ノ月カナ

誰モミナ滿レバヤガテ欠月ノ 十六夜ノソレヤ人ノ世ノ中

此兩首ノ如シ、因二人ヲ以テ鏡トスル譬有リ、十王經ノ鈔ニ、一人ノ老人死而焰魔王之朝ニ至ル、焰王呵責シ主バ、老人ガ曰、我レ存生ノ中ニ無常之音信ナキヲ恨ム、焰王ノ曰、汝ガ目カスミ、耳鳴、齒抜、髮白クナリ、手足ヲトロヘシハ、皆音信也ト仰セケレバ、老人返ス言ナク涙ヲ流ス、其時側ラニ若キ罪人有リ、進ミ出テ焰王ニ申テ曰、我ハ眼耳齒モ堅固ナリ、是レ音信ナシトセント申バ、焰王ノ曰、汝ザ娑婆ニ有シ中ニ若キ人ハ死セザルヤ、是レ若フシテ死ル者ハ、若キ輩ノ音信也ト仰セケレバ、是モ返答ナク涙ヲ流スバカリナリ、是ハ人ヲ鏡トスル理也、

と述べられている。三井寺園城寺は観音の寺でもあった。

園城寺には五別所と呼ばれる寺院が付随していた。「近松寺」「常在寺」「尾藏寺」「微妙寺」「水観寺」である。「園城寺之研究」は、巻頭図版に「園城寺古図五幅ノ内、三別所之図」を掲載する。そこには、世喜寺・近松寺・尾藏寺・微妙寺が描き込まれており、春山武松「園城寺の繪畫」（『園城寺之研究』所収）はこの図を「鎌倉時代に於ける園城寺の古図として史料の価値の大きいものである」と位置付けた。

近松寺は「高観音」とも称され、本尊は金色千手観音、安然和尚練行の地と伝える。

近松寺 關山の東、近松・尾藏・微妙の三寺あり、是三井五別所の其三也、近松寺は西山により、南世喜寺に接し、北は尾藏寺に隣る、東麓に路をひらひ惣門を立、本堂ハ山を背東に向て建つ、今の寺内も往古は悉く三井近松寺の界内也、本尊壹尺三寸の千手観音の像、智證大師の所刻也、傳ていふ、教待・教忍・行観の諸仙會集するの松あり、故に近松寺と名づくといふ、今高き地にあるを以て人皆高観音といふ、近松寺の近の字濁らざれば知る人なし、土俗の誤唱へ来るなるべし

安然和尚塔 南の方山上にあり、安然和尚、後に五大院の先徳と号す、(中略) 當寺ハ安然和尚練行の所、即入滅の地也、(中略) 入滅の後其遺骨を取て南の山に塔す、又其舊房を隆んにして近松寺と号せるなり、(国文学研究資料館(史料館) 藏『近江輿地志略』卷之十三「志賀郡第八」)

近松寺の北には「尾藏寺」、さらにその西に本尊十一面観音を安置する「微妙寺」があつた。「水観寺」は中院大門の下に位置し、これも本尊は十一面観音であつた。

新羅明神社の西の「常在寺」は、行尊を開基とする三井修験道の靈場であり、本尊は金色等身釈迦如来、別に一神祠が建立されており、これを熊野三山に擬していた(『近江輿地志略』卷之十三「志賀郡第八」)。

常在寺 在北院之北、西は高峯に倚り、北ハ界平野、南ハ熊野川現在村に限り、東方新羅社の鳥居並の北惣門を開く、本堂南向、本尊釋迦如来、

熊野権現社 本堂の東の砌にあり、社南向、鳥居あり、抑当社は平等院前大僧正行尊阿闍梨の建立、三井修験道の靈刹也、大僧正の性抖數を好し、裏祖大師の遺蹤を追て大峯葛城の峻峻を攀、熊野三山の幽深を尋ぬ、苦修辛勤無所不爲、永久四年遂三山第二の檢校と成る、又續で本の貫主に補せらる、自是寺務彌繁し、又老年を迎へ、

遠近抖數之行ひ意にまかせず、因茲兩山三山を此地にうつし、以峯釋迦嶽に擬し、即造一字、安置釋迦佛像曰常在寺、又傍に神祠を建て三所権現を勸請し、以て熊野三山に准す、山麓に流あり、名けて熊野川といふ、

『寺德集』は「我寺兼三事仕一朝事 右三事者、顕教密教修験也」と記す。熊野三山檢校に代々寺門派の僧侶が任命されるなど、園城寺は熊野信仰や修験道の色彩を濃く帯びていた。⁽¹⁸⁾

再び、『近江国輿地志略』卷之十三を披いてみよう。

尾藏寺 近松寺の北、微妙寺の東にある也、寺廊の北惣門を開く、東の方八幡宮の馬場に通ず、本堂東向、本尊十一面観音立像長二尺七寸、抑當寺は慶祚大阿闍梨の所創也、滋賀寺の靈佛を迎て本尊とす、都鄙遠近の道俗渴仰する處也、時有て參詣群をなす、往還緇素の戴く笠相軋て或は破れ或は脱ぐに時の俗、因て佛に字して波津禮笠の観音といふ、又呼で笠脱の観音ともいふ、

尾藏寺の十一面観音は、參詣人の多さに笠が擦れ合つて破れるため、「波津禮笠^{れがさ}の観音」「笠脱の観音」と称されたという。石山寺・醍醐寺・岩間寺など、付近に観音札所が散在していたことと相俟つて、園城寺は確かに貴賤群集の寺であつたに相違ない。だが、「波津禮笠^{はづれがさ}」「笠脱」の名称は、当初から「笠」に関する伝承に基づくものだったのだろうか。

六

『法華經鷲林拾葉鈔』卷九「脱龜着妙義有之耶」は瘡を病む稚児の機知を収載する。

叡山ニアリケル少童受癩病 参籠シテ葉師^二云、

南無藥師衆病悉除ノムナシクハ 身ヨリ佛ノ名コソヲシケレ

藥師朝タニ示現シ玉ヒテ

村雨ノ降トハ見エテ晴ニケリ ソノミノカサヲソコニヌギヲケ

(信解品)

この説話は遠く日向国の天台宗寺院、法華嶽寺にも伝えられていた。主人公は和泉式部である。¹⁹⁾

世に傳へていへらく、こゝにませる藥師と、三河國鳳來寺にませると、越後國米山にませるとをわが日の本に三つの藥師といへりけん、(中略)、(什物は)明和三年の火に焼けらせたりとぞ、今はたゞ和泉式部の納めまつれる琵琶一面とまたその主の神懸の柱のミのこりたり、(中略)和泉守橘道貞の妻なりけるが、いつのとしにや、くしき病有て歲月をあやなくうらぶれて経にけるを、時しありてぬば玉の夢に清水觀音菩薩のあらはれまして式部うつしき身にやみたる病をのぞかん事をしもねがい給ば、日向の國成眞金の御山の奥にまします藥師如練の御堂にこもりゐて、いみじくちかひを立侍りていのり願ひつべし、されバすゝやかなる昔の身にもかへりなんとおほせたり(中略)この御寺にまうで侍りて年月をけみし(中略)祈りに祈りまつれど、のどけきしるし有ともしれず、年經にけり、いでや、佛のめぐみもたへにしと思ひきはめて一首の歌、

なむやくししよびうしつによの願立て 身より佛の名こそおしけれ

とよみて、千尋の谷に身をうち投げて、くらき道にきえなんとおもひつ、有ければ、まほろしのうつ、にやあるらん、あかねさす日影あらたなるのりの庭にあやにかしこく如來のましまして

むら雨ハたゞひと時のものぞかし おのがみのうかさそこにぬぎおけ

と詠み給へる御歌の御聲さゝやかに聞えつれば、心のどかにさめ侍りて、病はさらにきえうせていとくもすくやかなる身となりて再び都へのほりてし、さるほどに式部都よりとこしへにおびて手なれにし琵琶一おもありけ

るを如來御堂におさめまつりて、末の世までもかゝる病を除給へる深きめぐみのしるしありつるためしを残し侍りけるとてなむ

（『修驗道史料集』Ⅱ所収『高岡名勝志』）

天保十四年刊『三國名勝図会』卷之五十五にも和泉式部の伝承が受け継がれ、彼女の奉納したと伝える琵琶の絵が描かれている。

上東門院の女房和泉式部、癪病を患へしが、種々の醫療驗なきゆゑに、京都清水の觀音に參籠しけるに、米山、鳳來寺、法華嶽寺、三所の藥師に祈るべき夢告を受く、於是米山、鳳來寺に至て、參籠せしかども其驗なし、因て遙に日州に下り、法華嶽の藥師へ參籠すといへども、其應驗を得ざりければ、此世の業縁は、是までなりと思ひて、身を墜して死せんと、志を定め、辭世に、

南無藥師諸病悉除の願立て 身より佛の名こそをしけれ

と詠じ、既に合掌閉目して、千尋の崖より自ら墜けるに、不思議に救ひ助られ、一異人式部の眼中に現じ、其手を取しと覺えて、

村雨は只ひと時のものぞかし 己が蓑笠そこにぬぎおけ

といふ聲の下に、數年の沈痾、忽然として平癒し、玉貌瓊姿に復し、再び京都に歸る、（中略）今に身投岡、式部谷等、蹤跡若干所、及び式部寄進の琵琶等残れり、

和泉式部にまつわる説話や和歌は、天台僧たちの間に数多く伝えられていた。『一乗拾玉抄』には、三十余首に及ぶ和泉式部の詠歌が収められている。参考までにそのすべてを列挙しておく。

妙ハ只八卷ガ名ニハカギラジナ 松竹櫻當意即妙

（卷一・序品）

法界ヲ只ダ一念ト見ル時ハ 知一切法皆是仏法

（同）

蓮々ト胸ノ蓮ヲ尋來テ 今コソ見ツレ胸ノ心蓮

北ハ黄ニ南ハ青ク東シ白ロ 西紅ニ染色^{ソメ}ノ山

降ル雨ヲトゞメ給ヘヤ難陀竜 トクシヤカ法リヲ人ニ聞カセン

小車^ワノ法リノ教ヲタノマズハ 猶ヲ世ニタドル身トヤナラマシ

乘リテトク出ヨトサソウ心ニテ 牛ノ車ヲ立ツル庭^{ニハ}カナ

妙法ノ車ニ乗レル身ナラズハ 争デ火宅ノ家ヲ出ヅベキ

門ノ外カ車ニ法ノ聲ヘ聞ケバ 我モ火宅ヲ出デスベキカナ

秋ノ野ニ妻マ乞鹿ノ聲ヘマデモ 皆与実相不相違背

小鹿嶋野原ノ露^{ツユ}ノ色ニコソ 常ネ無キ世ヲモ思ヒシリヌレ

色香ヲモ知ヌウキ身ハヨソニシテ 何ナル袖ニ花ノヲツラン

難波ガタ思ヘバ同ジコトノハラ ナド敷 本無 我ガタメト思ハザラン

ヲノゾカラ一味ノ雨^{不変真如}ノソ、ゲドモ 柳ハ緑^{随縁真如}リ花ハ紅

冥キヨリ冥キ道ニゾ入リヌベキ ハルカニ照セ山ノハノ月

二無ク三ツ無キ法リト聞ク時ハ 五ツノ障リアラジトゾ思フ

我袖ニ月影ウツル白露ハ 衣ノ裏ノ玉トコソ見レ

願ヒニシ我ガ有増ノ末エトゲテ 人モ空ヤ今叶フラム

チハヤブル神ノ見ル目モハツカシヤ 身ヲ思フトテ身ヲ捨ンカハ

物思ヘバ澤ノ螢モ我ガミヨリ アクガレ出ル玉カトゾ見ル

(同)

(同)

(同)

(卷二・譬喩品)

(同)

(同)

(同)

(同、卷六・法師功德品)

(卷二・信解品)

(同)

(同)

(卷三・藥草喩品)

(同)

(同)

(卷四・受記品)

(卷四・人記品)

(卷四・法師品)

(同)

今モカク忘レ形見ノ玉章ニ 文字ヲ読コソ心ナリケレ

(同)

二度ハ拂ヒシ庭ノ面ニ尚ヲ 塵リヲ置カジト風ヤフクラム

(卷四・宝塔品)

程モ無ク海ノ中ヨリ月影ノ 出テヤ山ニ近ク成ルラン

(卷五・提婆品)

名ニシヲハゞ五ノ障リ有ルベキニ 浦山シクモ登ル花カナ

(同)

悪人モ又女コモ此ノ経ニ 値ヘバ仏ニ成ルトコソケケ

(同)

トテモ我がハカナカルベキ身ヲ捨テ、 妙ナル法リヲガマザラメヤ

(卷五・勸持品)

タラチ男ノ年ノ齡ノ闌ヌマニ イカゞソノ子ノ老ト成ルラン

(卷五・涌出品)

シバシコソ世ノウキ事ニ隠ヌレ 巡レバ同ジ在明ノ月

(卷六・寿量品)

イヤシキモ本ノ身ナラヌ身ヲカヘテ 住行クニコソ愚癡ニナリケリ

(卷六・分別功德品)

根ヲ浸ス六ツノ田淀ノ柳陰 ニゴラヌ水ニ月ヤ住ラン

(卷六・法師功德品)

世ノ中ハ皆ナ仏ゾト聞ヌレバ 目ニ見ル程ノ物ヲラガマム

(卷七・不輕品)

マヨウベキ雲ヨリ出ル月ヲ見テ 秋クルナレヤ人ノ心モ

(卷七・神力品)

忘ルナヨ今ノ如クニ後マデモ 行末カケテ契ルコトノ葉

(卷七・囑累品)

我が胸ニ思モ消ヌ火ノアリテ 人ノ為ニゾ身ヲコガシヌル

(卷七・藥王品)

奥中ニ焦テ見ユル鮒ナレバ 折敷ノ浦ヤトマリナルラン

(卷八・陀羅尼品)

恥カシヤ井垣ノ草モ枯ハテ、 天神トハ争デイウベキ

(同)

盛リヲバ問ヒ過ル也奥山ノ 花散ル比ヲ人ゾ問ヒケル

(卷八・勸発品)

以上、『一乗拾玉抄』所引の和泉式部詠歌は、全引用和歌の約二割を占める。

天台宗と和泉式部との深い関わりを伝えるものは和歌に限らない。比叡山内には、実際に「泉式部石塔」と称する遺跡が残っていた。

一 紫式部石塔 慈眼堂門内

一 泉式部石塔 慈眼堂門内

（『天台宗全書』第二十四卷所収『山門名所舊跡記』卷第二）

一 和泉式部本地堂 在眞葛原

（同『山門堂舎由緒記』卷第一）

一 和泉式部本地堂 在眞葛原 舊跡

（曼殊院藏『山門雜記』）

同じく天台寺院であつた法華嶽寺にも和泉式部所縁の遺跡は数多く残されていた。『三国名勝図会』から抄録する。

○和泉式部髮掛柱 和泉式部、薬師に參籠の時、晝夜横臥せず、柱に倚て、時々假眠せし痕なりとて、薬師殿の

柱に膩痕あり、

○式部琵琶 和泉式部、愛玩の器なり、式部、薬師の神力にて沈痾頓に癒へしかば、歡喜に堪へず、此琵琶を薬師に報謝す、大信公、此器を江都に召し、覽觀す、歲月悠久にして損壞す、因て工に命じて修繕し、是を本所に還さる、此琵琶、長さ二尺四寸、径り一尺二分あり、花欄きんらんの袋に藏む、式部が舊物を今に傳ふるは、唯髮掛の柱と、琵琶となり、

○身投岡 當寺の前路八町坂を踏れば、左方にあり、式部身を投墜さんとせし所なり、當寺の南にあるを以て、南ヶ嶽ともいふ、此岡、孤嶺にして屹立し、其三面絶崖にして、數十仞あり、其頂上平坦にして、小社あり、
○式部腰掛松 身投岡にあり、式部腰を掛し松といふ、古松は星霜を経て枯たり、今の松は、周圍三尺餘あり、是を植繼て、其舊蹟を傳へしといふ、

○式部谷 當寺二王門の西方三町許にあり、垢離谷ともいふ、式部薬師へ祈念の時、日々此澗水に浴し、身を淨

めし所なりといふ、

○愛染川 並 愛染社 當寺の山下、卯辰方十八町にあり、（中略）傳教大師建立なりとぞ、和泉式部、病癒て、見て、土人にいかなる神ぞと問ひけるに、宿世結びの權現と答へしといひ傳ふ、

○車返 北俣村にあり、（中略）和泉式部、法華嶽寺參籠の時、休息して車を返したる所といふ、（中略）川上村の内に、杖取坂あり、式部に杖を與へし所といへり、

○和泉式部略傳 （中略）然るに児湯郡、佐土原土人の説に佐土原鹿野田村、氷室山の腰に、式部塚とてあり、其山の子方十五町許、幸納ユキノといへる所の畠中に、一字の地藏堂あり、是式部が形代といひ、堂の丑方三丁許に林叢あるを、式部が茶毘所なりといふ、鹿野田村は、毎年三月三日に、式部忌日なりとて、祭祠を行ふとぞ、（中略）又鹿野田村、幸納の原田某、筒藏の式部由來記に、和泉式部は、十月五日、法華嶽に參籠し、明年正月十六日、都に上り、其後また日向に下り、法華嶽へ禮謝の爲に參詣し、上京の時、鹿野田村にて俄に病に臥し、三月三日、四十三歳にて卒せしを、幸納といふ所にて茶毘し、櫻樹を植て標とし、一字の堂を建て、地藏を安置して式部が形代とす、遺骨は氷室の里に葬ると、（中略）佐土原の式部塚、實に其葬所なる、亦知るべからず、

（卷之五十五）

園城寺内尾藏寺の本尊「笠脱觀音」も、「笠」の原義は「瘡」であつたと推測される。⁽²⁰⁾

七

『三国名勝図会』では、和泉式部は病が癒えないことを悲しんで谷に身を投げた。しかし、不思議に助けられて望

みが叶えられたという。

谷に身を投げる行為は、所謂捨身の行である。その一例として、『岩間寺縁起』に目を転じてみたい。⁽²⁾

古老伝云、園城寺叡効来于当山、坐禪三箇年、其間無言、合食毎夜三千遍礼拝、毎日六時勤行、法華經転読、六千部妙経、給昇精舎之砌西南角之桂樹、捨身、其詞云、我不愛身命、但惜無上道文、投身三箇度、護法立涸底、延袖受之、叡効之身、一毛無損、遂浴皇恩、補權律師、

「投身三箇度、護法立涸底、延袖受之、叡効之身、一毛無損、遂浴皇恩、補權律師」と語られる捨身説話は、『三國名勝図会』の一節「既に合掌閉目して、千尋の崖より自ら墜けるに、不思議に救ひ助られ、一異人式部の眼中に現じ、其手を取しと覺えて」云々の記述と酷似する。加えて、この『岩間寺縁起』書写には園城寺の僧が携わっていた。

抑当山縁起、往年之比、炎上之時、焼失畢、仍誓渡、以古老之伝言、粗注置之、年号歳序、分明不覺悟、後見之人、勘年記、可委記置也、口筆之間、謬失定多歟、愚意所存、莫致誹謗、南無大悲観音、南無五所権現、知見我願、証明事状矣、

仁平三年 癸酉 四月十四日 癸酉 常住誓渡

常住僧次第 自七人已上、常住
依不知、不注之、

……誓渡上人 出家以後、以山林修行、難行苦行為業……

建久二年十二月十四日、依常住之誂書寫了、当本文字不正之間不審甚多、後見志之、

執筆三井末流信観

『続古事談』は、

巖間寺、正法寺トイフ、山城國宇治ノ郡、上醍醐ノ奥ノ笠取山ノ東ノ峯也、(中略) 日本第三ノ靈驗所トゾ、第

一ハ熊野、二ハ金峯山也、

と述べる。岩間寺は三井寺修験の修行に励む僧たちの集う場でもあった。⁽²²⁾ 叡効の捨身伝説が『岩間寺縁起』に流入していることはそれをよく示していよう。『三国名勝図会』に引く和泉式部の身投説話も、明らかに天台修験に類する説話から影響を受けている。

岩間寺は西国三十三所観音霊場の札所であった。⁽²³⁾ 『撮壤集』は同寺院を第十二番札所に挙げる。『厳助往年記』天文十四年（一五四五）十月十八日条は、「岩間八講行之、予登山、俊聡 深應 俊照 弘存 宗然 永増等也、心空上人同道也」と記し、岩間寺において岩間八講が催されたこと、醍醐寺理性院の厳助がその場に赴いたことなどが分かる。岩間寺の隆盛の一端を垣間見ることが出来る。

本稿冒頭に掲げた一首「仏トハ何ヲ岩間ノ苔庭 只慈悲心ニシクモノハナシ」は、もと近江国に名高い慈悲の菩薩「岩間寺観音」を詠み込んだ道歌ではなかったか。⁽²⁴⁾

〔注〕

- (1) 拙稿「法華経直談鈔」（岩波講座「日本文学と仏教」第六卷所収・平成六年）参照。
- (2) 引用は慶安四年刊『法華経鷲林拾葉鈔』（臨川書店）による。この歌は同書卷十八にも重出する。
- (3) 引用は金台院本による（『法華経直談鈔 古写本集成』所収・臨川書店）。
- (4) 『御伽草子の世界』（奈良絵本国際研究会編・一九八二年）所収。
- (5) 吉田多津雄「清水堂本『富士之人穴の由来』」（『駒沢国文』第八号・昭和四十五年十月）参照。
- (6) 一首は『一休和尚仮名法語』にも引用される。

まことの道は、萬事法度をそむかず、世にしたがひて、かたく法をまもる人を、佛道に成就の人と申すなり、(中略)こを佛、三部經に己心の彌陀、唯心の淨土とのべ給へり、此の文字の心はおのれが心彌陀、たゞ心の淨土と申す也、然れば十萬億土とは御ねがひあるまじく候、

佛とは何をいはまのこけ延たゞ慈悲心にしくものはなし

この歌のごとく御受用候へば、なにことも佛心と見まゐらせべく候、

- (7) 『大正新修大藏經』第七十六卷所収。また、『日吉密社參午帳』(文化六年九月二十三日写、歴史民俗学論集2『盲僧』所収)の「岩瀧社」の項には、「蹈躡姫尊本地弁天靈石竹生嶋ヨリ影向有穴通竹生嶋拜殿一字舊跡」とある。

- (8) 永井義憲先生「上総に於ける安然の伝説——『安然旧跡書』と『道脇寺由来記』」(『大妻女子大学文学部紀要』第二十二号)、拙稿「潮『醒睡笑』」(『成城文藝』第一三九号・一九九二年)など参照。なお、岡田祐孝「園城寺を巡りて」(『園城寺之研究』所収)は「近松寺」について次のように述べる。

……此寺は、日本天台教學上では全く第一人者である安然和尚の開基だと傳へられ、本堂の前にある菩提樹の大本は、和尚が天竺に渡られて持つてお歸りになつた菩提樹の杖をつきさ、れたのが生長したのだと云はれて居る。所が、安然和尚は貧乏で名高い方であるだけに、寺の南端にさ、やかな堂が有つて、そこには投げ出しの辨天と云ふ辨財天がまつて有る。縁起に依れば、何時も貧乏のしつゝけで、盛に著述をされるのに紙代に困るのみならず、終には生活にも窮したものだから、とう／＼辨財天に福分を授けて下さる様御願になると、辨天様は和尚の前世や現在に何か福分を受ける種がないか、おさがしになつたがどうしても何一つ見つからない。それで仕方がないものだから、あなたにはお授けする福分の種が少しもお有りにならないから、どうする事も出来ないが、若し私の、と云つて足を少し出して、此足の裏をおなめになりましたら、福分をお授けしますと云はれた。安然和尚は夫れを聞いて大變怒られた。所が和尚は貧乏では有るが、十分修行をつまれた位の高い菩薩で、位から云つたら辨財天などはずつと和尚よりひくいから、和尚の怒を蒙つた爲めに、折角何かしてと思つて親切から出された辨財天の足は、とう／＼すつこめることが出来なくなつたから、今もそのまゝになつて居ると云ふ。何だか變な話である。けれども此寺から東南に向ふ山道を少し進めば大津市の南部を一眸の裡にうつめる高地に、石の塔が有り、安然和尚御入定の地として塔婆が立つて居る。昔から土地の人達は、その塔の見える所に金持はないと云つたと云ふことだ。

- (9) 引用は『神道大系』神社編十六による。なお、橋本進吉「安然和尚事蹟考」(『傳記・典籍研究』所収・昭和四十七年)には、

『走湯山縁起』に見える安然是同名異人であろうという指摘がある。

- (10) 『神道大系』神社編十六所収。なお松本公一「『溪風拾葉集』所引『江島縁起』について」(『国書逸文研究』第二十二号・平成元年十月)・小林健二「芸能圏のお伽草子—観世長俊作『江野島』と『江島縁起絵巻』—」(『国文学』第三十九卷一号、一九九四年、学燈社)など参照。

- (11) 『東京史談』第二十二巻第四号所収。昭和二十九年。呉文炳「江島考」(昭和十六年)参照。

- (12) 引用は「続々日本絵巻大成」による。同解説には、狩野探幽筆の「竜口法難図」(本法寺蔵)の図版を挙げ、「図様は異なるが、光明が剣を折るというモチーフは『註画讃』と共通する」とある。なお、拙稿「熊野の本地」私注」(『成城国文学』第九号・平成五年三月)参照。

- (13) 『竹生島縁起』にも観音と弁才天の習合が見える。同縁起は応永二十一年(二四一四)、天台僧普文が比叡山の古記をもとに執筆したものであった。また、平成七年九月十四日より十二月十九日にかけて、池袋東武美術館・京都文化博物館に於いて開催された「西国三十三所観音霊場の信仰と美術」展の図録(日本経済新聞社)には宝蔵寺蔵の如意輪観音像一幅(鎌倉時代)、『観音霊験記』(錦絵三十三枚、二代安藤広重・万亭応賀・三代歌川豊国)などが掲げられている。第三十番「宝蔵寺」の絵図は『発心集』の松室童子の説話を題材に取り上げて琵琶を描き、「この児ハ観音の應化なれば霊験他にこへて今にあらたなり」と記す。また、『竹生島の本地』と題する古活字版は、観音信仰に基づく御伽草子『さよひめの草子』の異本として知られる。

- (14) 「當道新式目」『譬女縁起』ともに引用は「防長盲僧琵琶史料」(『日本庶民生活資料集成』第十七巻所収)による。

- (15) 拙稿「鞍馬の黒牛—「ささやき竹」攷—」(『説話論集』第五巻所収)・中山太郎「日本盲人史」第四章第四節「當道と賀茂稻荷祇園三社との関係」(昭和九年、パルトス社)、柴田実「盲人法師とその伝承—」(『當道法師一宗根元記』について——『中世庶民信仰の研究』、昭和四十一年、角川書店)など参照。

また、「北條記」巻二には「又辨才天と申は、則法身の大士也、八臂を具足は八大觀音の惣体なり、三光天子と現して威光を万方に耀し、八大龍王と成て、恩波に四海に灑し給ふ、(中略)就中、辨才天は觀音の御分身、北條家の守護神、御紋は是大蛇の鱗とかや、(中略)又御城北の堀の内へ、則法印を以て、繪の嶋の辨才天を移し奉り、當城の鎮守と崇奉り、武運長久を被折けり」という。なお、慶長十二年写「富士の人穴の草子」(『室町時代物語集』第二巻所収)は、富士山浅間権現を觀音の垂迹とする。

まづ、地獄の御奉行、六人なり、第一には箱根の権現、第二には伊豆の権現、第三にしら山権現、第四にみづからなり、

第五にみしまの大明神、第六に越中立山無間の地獄のぬし、りうそう権現にて御座候なり、(中略)これはみな、観音の垂迹なり、

【西國三十三所權輿】は「又富士山權現ノ御託宣ニモ、順禮ノ功德廣大ナル故ニ、十徳ヲ拳ゲ玉フ」と記す。富士も観音信仰と結び付いていた。

(16) 宮地直一「平安朝に於ける新羅明神」(「園城寺之研究」所収) 参照。

(17) 天台宗寺門派の総本山、近州園城寺は主に山門延暦寺との軋轢によって、しばしば炎上破却の難に会った。最初の焼討ちは永保元年(一〇八一)、山門の衆徒が押し寄せて放火し、経巻・仏像その他、悉く灰塵と帰した(『扶桑略記』永保四年四月二十八日条)。次いで、保安二年(一一二二)にも園城寺は山徒による破却に会った。『諸神本懷抄』の一節を引いておく。

カノ新羅ノ明神トキコユルハ園城寺ノ鎮守ナリ、万里ノ蒼海ヲシノギテ、コノ寺ノ佛法ヲ守護シ給フ、シカルニ鳥羽院ノ御宇、保安三年閏五月三日、延暦園城ノアラソヒアリテ、三井寺焼ケニケリ、(中略)コノタビハソノタ、カヒイタリテ強盛ナリシカバ、顕密ノ僧侶多ク命ヲウシナヒ、安置ノ佛經コト々々炎ヲ免ガレズ、聖跡マノアタリケブリニ化シ、靈場ヲマチニ血ニ變ジキ、伽藍ハイシズエノミ残りテ、シカシナガラ虎狼ノスミカトナリ、フルキアトハ草ノミ深クシテ、麋鹿ノソノトナレリ、マコトニ目モアテラレザリケル有様ナリ、ソノコロアル寺法師ノ夢ニミルヤウ、褐冠シテ白キハカマ着タル人、伽藍ノアトニ徘徊ス、タレゾト問ヘバ、コタヘティフヤウ、ワレハコレ新羅大明神ノ眷屬ナリ、コノ寺ヲ守護センガタメニ經廻スルナリトイヒケリ、コノ僧夢ノウチニアザケリテイハク、佛像經卷堂舎僧房コト々々灰燼トナリヌ、无益ノ守護カナトイヒケレバ、カノ人コタフルムネ無クシテウセス、ソノ、チ直衣キタル老翁ノ、マユノ毛長ク垂レテ口マデニオヨビ、カミヒゲ白クシテ、ソノカタチ常ニアラズ、アヤシゲナル人イデキタリ、僧ニ告ゲテイハク、汝ガイフトコロ、ハナハダ子細ヲ知ラズ、ワレ遙カニ新羅ノ本國ヲ捨テ、コノ寺ニキタリ、住スルコトハ堂舎僧房ヲ守護セントニハアラズ、タゞ出離生死ノ心アラン人ヲ守ランガ為ナリ、シカルニ、コノタビノ炎上ニヨリテ法滅ノ菩提心ヲオコシタル僧徒アマタアリ、一定生死ヲ離レナントス、ワガヨロコビタゞコノ一事ナリ、コノ故ニミヅカラモコレヲ守リ、眷屬ヲ遣ハシテモコノ人ヲ守護スルナリ、佛像經卷堂舎僧房ハイクタビモ焼クベシ、イクタビモツクルベシ、出離生死ノ心アル者ハマコトニマレナリトイヒテ、カキ消スヤウニウセ給ヒケリ、

(末)

行尊はこの保安の焼討時の園城寺復興に尽力した人物として知られる。以後、南北朝時代にかけての三井寺炎上は、記録上のみでも十数度を数える。園城寺は常に山門との抗争により、甚大な被害を受け続けたものの、元龜二年の叡山焼討ちの際に

は損害を被らなかつた。織田信長は園城寺内に入り、叡山に攻め上つた。焼討ちを免れた聖教類は数多く園城寺に残っていたと思われる。門跡田満院旧蔵『二帖御書』などもその一つであつたらう。

(18) 『寺徳集』には、新羅明神の本地に関する説に続けて、

問。於諸社皆有使者。此神使者如何。

答。此神使者鳥鳥也。從昔鳥二羽相續不絶。不思議事多之。此事委神主存知也。讓彼不記之。

と記す。鳥は熊野の使令としてあまりにも有名である。園城寺守護神の新羅明神の使者が鳥であるのは、この地に熊野信仰が根付いていたことを物語る。

(19) 注(8) 拙稿参照。なお、『高岡名勝志』は法華嶽寺の草創について、

眞金山は日向國諸縣郡高岡郷にあり、御寺を法華岳といふ、そのかみ元正天皇の御宇、養老二年八月八日といふ日に、この御寺の岳に紫のくも立て雲のへにこの世の常ならぬ仙樂にやたへなる音のして、月のみ空に澄み渡りければ、俗人らあやにかしく思ひけん、一字の御寺を設けり金峯山長喜寺となん名づけ給へりけり、その座し御像は釋迦佛と薬師如来なり、其後桓武天皇の御宇延暦二十五年といへる年に、傳教大師御岳に詣でて如来ほとけを拝みけるとぞ（中略）おほよそ三年を経て大同の三年に成たりとつたへいえり、此時になん山の名を眞金と改め、寺を法華岳とかへたりとぞ、

と伝え、また、元龜中に天台宗が退転したため、同寺院は禪宗に改宗したと述べている。法華岳寺周辺に多くの盲僧寺院が「散在していた事實は、根井淨「法華岳と日向の山岳伝承」（山岳宗教史研究叢書16『修験道の伝承文化』所収・昭和五十六年）に詳しい。ほか、『高岡町史』下巻参照。

(20) H. O. Roermund 氏「疱瘡神」（岩波書店・一九九五年）「疱瘡絵・麻疹絵に見たる庶民信仰の形態」（町田市立博物館図録第一〇二集「錦絵に見る病と祈り」所収・一九九六年）は、疱瘡流行の際、神社から「笠」を拝受・返納する習俗について触れている。

(21) 木下資一氏「続古事談」巻四神社仏寺篇石問寺説話をめぐって」（『中世文学』第三十六号・平成三年）に翻刻が載る。

(22) 阿部泰郎「対話様式作品論序説——「聞持記」をめぐる——」（『日本文学』第三十七号・一九八八年）に紹介された真言宗覚印（長寛二年没）の著「聞持記」は、「客僧すなわち未見房と今見房が参入して（中略）ついに法門問答に至つた。この「教訓清談」は晩陰に到つて漸く果て、兩人は偶然の参会を賀びつつ「互作礼而去」と失せた。右の奥書は、この座談にての問答を「聞持房」が傍らに聴き、これを草庵にて記したことを説くもので、その舞台は岩間寺であつたという。

(23)

岩間寺の巡礼歌については以下の注釈書に記載がある。

西國十二番近江國勢田郡岩間寺千手菩薩、五尺二寸ノ像ノ中ハ、四寸六分像ヲ収ム、泰澄法師ノ開基ナリ、(中略)水上ハ何國成ルラン岩間寺

ウツ浪カ松風ノ音

水上ハ何國ナルラン、則チ真如法界ハ觀世音菩薩御說法ノ道場ナルガ故ニ、岸打ツ波モ松風ノ音声モ、皆是レ岩間寺觀世音菩薩、衆生濟度ノ御說法ト信聽スベシ、

(江戸末期写「西國三十三所権輿」)

第十二番、江州岩間寺

水上者何國奈流覽岩間寺、みなかみへいづくなるらんいわまてら、きしうつなみかまつかぜのおと岸鼓浪乎松風乃音登

……水上ハいづくなるらんといふハ、近くにハ化身の淨土、日本那智の瀧、南海補陀の巖、遠くハ報身の淨土、九山八海、及法身無利不現身の淨刹まで、即今面前に嚴然として現前す、是泰澄大師の天真獨朗の境界なり、加賀の白山も此時にあらハレ、越智の空鉢も此代に現ず、誠に神異不測の大聖者なり、此山も同じ不思議の道場とかねてしるべし

(寛政八年刊「西國巡礼歌円解」)

十二番近江ノ岩間寺

水上ハ何國ナルラン岩間寺岸ウツ浪カ松風ノヲト

抑此哥ハ生佛一如ノ心ヲ詠ジ玉フ也、水上トハ大悲ノ源ヲ云也、流ヲ汲デ水上ヲ知り、香ヲ聞テ其根ヲ尋ル、下ノ句之岸控浪トハ岸ト浪ト相寄テ音ヲ發ス、松ト風ト合寄テ声ヲ出ス、岸バカリニ音ナシ、浪バカリニ音ナシ、松風モ亦復斯クノ如シ、觀音ノ利益モ衆生有ガ故ニ現レ、衆生ノ信モ觀世音在ス故ニ發ス、然バ大悲ノ源ハ衆生ノ信心ナリ、凡夫ノ信心ハ觀世音ノ大悲ナリ、衆生有レバ佛有リ、佛有レバ衆生有リ、是レ生佛一如ノ理也、

(「西國巡礼歌要解」)

岩間寺の巡礼歌は、道歌「仏トハ」とは異なる。だが、岩間寺退転以前、諸国の修行僧たちが参集した中世において、「仏トハ」の歌も、岩間寺所縁の詠歌として口遊まれていたことを想像させる。

なお、注(13)に引く「西國三十三所——觀音靈場の信仰と美術」展の図録に岩間寺藏十一面觀音立像(平安時代後期)・千手觀音懸仏(鎌倉時代)正親町天皇繪旨(天正五年、岩間寺再興を命ずる書)「觀音靈驗記」などが掲げられている。「觀音靈驗記」は第十二番「岩間寺」に巡礼歌「みなかみはいづくなるらん岩間寺きしうつ波かまつ風の音」を書き入れ、芭蕉が岩間寺を信仰したとの伝承を載せる。

(24)

天正五年(一五七七)、岩間寺は退転著しく、正親町天皇が修造を命ずるほどであった。さらにその百五十余年後、享保十

九年（一七三四）に編纂された『近江輿地志略』には、同寺は本尊の千手観音さえ大破し、往時の面影を止めないまでに荒廃していたと記されている（巻之三十八「志賀郡第三十三」）。